

離農を希望に変えて

北海道名寄産業高等学校 酪農科学科 2年 高原 陽樹

「将来は新規就農で酪農経営を行う」。これが今の私の夢です。朝目覚めるとすぐに、牛舎に向かう父と母。私が目覚める頃には、母は仕事を終え、朝食の準備も済ませてある。そして父はそんな母から少し遅れて家に戻ってくる。その繰り返し、私の日常でした。

私の家は、道北の美深町というところで酪農業を営んでいました。幼い頃から、牛と共に生活するのが当たり前であり、毎日父と母が朝早くから、夜遅くまで、休まず仕事をする姿を見て育ってきました。幼い頃は、とにかく手伝いをするのが嫌でした。手伝いといっても、私に与えられる仕事は除糞ばかり。汚くて、つらい仕事をさせられ、家が酪農家であることに嫌悪感を抱いていました。休日はもちろんなく、その頃の私のささやかな夢は「家族みんなで、遠くに旅行をすること」。他の同級生と同じように、休みがあって、当たり前のことができる日常生活を送りたいと心から願っていたのをよく覚えています。

しかし、私が中学校に上がった頃には酪農に対する考え方は変わっていきました。部活動を始めて、作業を手伝う時間が少なくなったこともあり、「酪農」という仕事を別の角度から見ることができるようになったのだと思います。トラクターを使った仕事も手伝えるようになり、部活動が休みの日には、給餌や搾乳など、自分から積極的に手伝うようになってきたのです。休みの日は一日中牛舎にいて、父と母の仕事を自ら進んで手伝うというのがその頃の私の日常となっており、漠然と「将来は、酪農業を継ぐ」という選択が自然に浮かび、迷いはありませんでした。年齢とともに、私の酪農に対する考え方も変化し、それと共に、我が家の経営状態も変化していました。しかし、私はそれに気付くことはありませんでした。仕事が終わると、いつも私の学校生活や部活動の話を楽しそうに聞いてくれる父と母。学校生活で悩んでいるときには、いつも両親は相談に乗ってくれ、励ましてくれました。私は両親が仕事で悩み、つらい表情しているのを一度も見たことはありません。いつも明るく、楽しく仕事を行っており、そんな両親を見ていると、学校での悩みも忘れてしまうほどでした。「うちの経営大丈夫なの？」と聞いたときも「大丈夫だ!!」と明るく、笑い飛ばしていたのです。

しかし、私の家は平成24年の3月で離農しました。高校の進路選択を控えていた私に心配をかけたくなかつたのでしょう、最後まで、両親は私に相談することなく、この決断をしました。私に話しがあつたときには、もう2人の中で結論は出ていたのだと思います。いつもの夕食の明るい団らんの中で離農という話を伝えられました。いつも明るい父が、最後に言った「ごめんな」の一言と、母が流した涙は、一生忘れることはない

思います。

牛たちが売られていき、空っぽになった牛舎を見つめながら、私は、生まれてから、今まで、この牛舎で過ごした15年間をぼんやりと考えていました。あんなに、幼い頃は酪農家であることに嫌悪感を抱いており、普通の日常を求めていたのに。休みの日に休める日常が手に入ったのに、少しも喜べない自分がいました。なにもかもが空っぽになりました。将来は酪農を継ぐことを決めていたので、進学先は名寄産業高等学校の酪農科学科を選択していましたが、高校に入学したばかりの頃の私は、酪農家として家業を継ぐという夢に向かっている酪農科学科の友人達と、離農という現実に将来の夢を描けない自分との格差を感じると同時に、友人達の何気ない家の経営に関する会話に耐え難い苦痛を感じていました。

そんな私が、また酪農に対し希望を取り戻すことができるようになったのは、朝晩の実習が始まった頃でした。朝早く、まだ暗い牛舎の中での搾乳実習。1頭目の前搾りを行い、ミルクカーを掛けたとき、一瞬父の姿が見えたような気がしました。幼い頃から見えてきた父の搾乳する姿が、一瞬自分の姿に重なったのだと思います。その父の姿が浮かんだ瞬間、自分の中でずっと押し殺してきた「牛が好きだ」という想いが溢れてきたのです。離農という現実を受け止められない自分を責め、その決定をした両親を責め、自分の気持ちを理解してくれない仲間達を責め、そして、何の罪もない牛たちをも私はずっと責めてきました。でも本当は、ただ牛が好きで、酪農がしたい、というシンプルだけれども、強い思いを持っていたことに気づかされたのです。

「将来はもう一度酪農をしたい」そう考え、現在は畜産環境コースで、乳牛の飼育や生体などを基礎から学習しています。TPPの参加や飼料価格の高騰などが進む今の経済情勢を考え、ただ、牛を飼育するだけではなく、多くの付加価値を付ける酪農経営のスタイルなども学習したいと思い、食品加工の学習にも精力的に取り組んでいます。いつかは牧場を経営しながら、乳製品の販売なども手がけられたら、などと希望はふくらみ、毎日が充実しています。中でも、私が一番興味を持って学習しているのが繁殖です。実際に受精士の方とは昔から関わりがあり、話も伺っていましたが、酪農家ではなくなった今、私にはまた違った意味を持ってその話を聞くことができるようになりました。受胎率向上が酪農経費の大幅な削減につながるという受精士さんの言葉が、私の中で、新たな夢のきっかけとなったのです。我が家のように、これ以上離農で苦しい想いをする酪農家が少しでもなくなるように、経営改善の第一歩として、受精士の役割はとても重要であると考えるようになったのです。受胎率が下がる原因は個体そのものだけではありません。何よりも、酪農家それぞれの管理や、発情の見極めがしっかりとできるかどうかで大きく変わってくるのです。将来の夢を実現させるためにも、まずは受精士の資格を取得し、

腕を磨き、多くの酪農家の受胎率が向上できるよう、最新の知識や技術を提供していきたいと考えています。現在の日本の酪農家の発情発見率は50%以下というのが現状です。しかし、畜産の授業で学習を進めるうちに、牛舎や牛がきれいに管理されている酪農家は、発情発見率も受胎率も高いことがわかりました。それは、毎日丁寧に牛の様子を確認することで発情発見率が向上すること、乳牛の感じるストレスが少ないことが要因です。酪農家の中には、受精士の腕が受胎率を下げると考える人もいます。しかし、私は、受精士の腕を最大限活かし、無駄な経費を削減できるよう、発情確認の方法や、牛舎環境の整備の大切さを酪農家の皆さんに伝えていきたいと考えています。それができれば、経営改善の手助けができるのではないかと考えています。また、将来新規での就農を考えたときに、無駄な経費を削減した酪農経営を実践するため、自ら受精を行える酪農家になりたいと考えています。現在は、その第一歩として、インターンシップで受精士の方の指導を頂きながら、実践的な学習を深めていく計画を立てています。

私は、酪農をするという夢をあきらめかけていました。しかし、牛たちが、そして酪農に情熱をかけてきた両親の姿が、もう一度酪農を行いたいという私の想いを後押ししてくれました。私は牛が好きです。そして、酪農が大好きです。私のように若い後継者が、これ以上夢を絶たれることがないように、そして、離農という苦しい経験を希望に変えられるよう、これからの日本の酪農業発展のために頑張っていきます。